

續車危記



0



150 cm

10



SEKISUI JUSHI



20



30



40



50



60



510
7
38

51
7
38



一 歌代正統ハ俊成 建家 富家

頓河 道遠院

一 孫ハ勺又存リ其の枝

判云在方よりやいられ

勺より作

一 浦さしりくも鳴きもこれ

判云がくも鳴きもこれ

あちれくはひてりて

方ハのひもも條情ある

一 年毎に夏秋身いつぶの續者

ふらりてやちと事りて

ら後のうふわと且言れ
もくハ年ぬえし作の
作

依花結月

あにあそかふをもしく
かをらの印に月をさす
かまふをもしく
くまふをもしく

月不雲

これよりか一物と云ふ
かりし月には月をさす

古歌よは類くす

一物と云ふは改む

同類よむ

心家送年

書本に所をうふ
くまふをもしく

龍王制七十校於去年

不相應之後不詠は

年来作

一也しを初の日 其の右

まふをもしく

けりこの相いかれ入るるを
おんやの森のこころを
おはれははつらむと
雨の夕言の夕言れは
凡そ森のこころを
かふ相はまを河の中に
へるこころの夏ふりや
な秋相の人にほし
おんやのこころを
おんやのこころを
おんやのこころを

けりこの相いかれ入るるを
おんやの森のこころを
おはれははつらむと
雨の夕言の夕言れは
凡そ森のこころを
かふ相はまを河の中に
へるこころの夏ふりや
な秋相の人にほし
おんやのこころを
おんやのこころを
おんやのこころを

枯夕

けりこの相いかれ入るるを
おんやの森のこころを
おはれははつらむと
雨の夕言の夕言れは
凡そ森のこころを
かふ相はまを河の中に
へるこころの夏ふりや
な秋相の人にほし
おんやのこころを
おんやのこころを
おんやのこころを

よき事いふ事よしの事を作

いふ事よしの事

一 儀 撫 逆 せしむるこころうき事いふ事
もさうらひもりもち男はこゝれあひ
ももりこゝれさうき事あつた
かろしき事いふ事いふ事
くしき事

いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事

五六年 六七年 かなしくいひま
やううに 讀くせうけりや

・伊勢物語又十一日の月とあり

んとんか休之ウイ千上讀い

・古日本圖書中いふ六七年と云

讀マドい又今セナトセト七讀い

一 倭指遺刻又 選本内親王

以外をうゑたそら思は丹后公

いのかのやうな 友後まらけ

丹后とも清くそらけりや

・ふれとら只今も好い

一 千本古書 百十番 平徳吉

梅のふゆにたひの風こま

まけりゆふのふゆこま

判云 雪ふよははなるとい

は夏の柳を雪ふことい

又まけり中へきまらるる

けりぬくはり

そらいよもわかぬものへ

嘆いも昔やい

・えは判の初といふ

い

一同平建

蘇代よる所を城のあきところも

こなりふりあのをすまひいかなふ

こなりやう花といかりあのみえ

くぢや

・水葱ト出云 和名唐蘭云

穀 胡谷 水菜也可食

楊木漢語抄云水葱奈木

一云蘇菜斛音與穀同今

案斛宜作護斛者石斛

他草之名也

本草にこなりあうまは神

しりやいぬいものうらふ

とあり相のいいと俗云は

南木と一草とをな作

一同飛鳴

こなりあうまは神

しりやいぬいものうらふ

とあり相のいいと俗云は

南木と一草とをな作

こなりあうまは神

しりやいぬいものうらふ

く清くもくわくもくわくも
け刺の心は赤いさうりや 活言長不
美作いりてまはるまは

・字の清くもくわくもくわくも
とく清くもくわくもくわくも
く清くもくわくもくわくも
く清くもくわくもくわくも
く清くもくわくもくわくも
く清くもくわくもくわくも

月本す店

く清くもくわくもくわくも

く清くもくわくもくわくも
・才四句よりおまのまはる
居るまはるまはる

初述懐

く清くもくわくもくわくも
・字の清くもくわくもくわくも
く清くもくわくもくわくも

書附い

・右初述懐の字推帯り
見りて上句の上句より中

吾素相調下句ハ下句ニ
洞ニテ詠出ルヤト素ハ凡ク
日中ハ塵世中ニ煩方無
止時クク一ノ夜トモ不度
モ不睡ルハ身如ク未臥景
ニヤク快ハ志ラガレハ人ノ深
カヨニキレヌカサレハ我ノ
事斗ニシテ何ノ旨ニ合ニ
連続一ト不睡ト云ムノ致
詠我ト素ハ他不極哉扱右
の三ノ名字後トキハ其ノハ

不す睡ハ何レノ事ニ
ヨカレぬモハカレカレ
ハ素ハ何レノ事ニ
ト云フモ一ノハ其ノ

一 萩の素書
・ 素の字の入り
・ 素の字の入り

一 子規啼
・ 子規啼の字
・ 子規啼の字

一 切意
・ 切意の字
・ 切意の字

一 白化意
・ 白化意の字
・ 白化意の字

一 解意
・ 解意の字
・ 解意の字

・ 素の字の入り
・ 素の字の入り
・ 素の字の入り

一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり
一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり

一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり

一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり

一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり

一 諸社式仏社名に和名を
出さずして和名とし一に和名
後二の和名をいふなり

・さよふらふの文の宛名
當代の氏なりをこまごま
し

歩何志

いふ所らに名をいなるを海川
しやうよ力い志所をいも
・大氏和方ハ下白うも可
おまひ大不宣と「ま」い意
ヶ原の亦よふ氏をいふ
よ心お中にもはけらふ氏
月ウ半歩人の好可作

村五集・村五集村五集

ひらね集こもふ氏もはけりて
うさふさふはは方はどの坊

光廣富士の歌

年入るえりしんねらの中もふは
しうにえれしむしう富士の
・大氏三ふくいよまの字二
お新の石原氏のおりて
あきり

一書青の歌

かこいふ書青のいはをいす

ゆきすしとの柄しをうり

・右の字も射して並ぶ

字すくせりろく作受今

も氏かろ所いりすの御事

よみ程ゆ味をす作

一類林忠抄ハ山科若酒言末巻

撰すすちらふ物す作

一云ハ息寸法とす

・さす寸法ハ寸法と

吟味仕事百半寸あり

らりすすの定家書家

其後ハ寸法がしハ寸法の重

長とす宋画ハ順徳院御面

首三寸ハ被合息ハ古例

いハ之ハ息の長短とす

俵受ハあつりハ寸法の

近代ハ先院がも長短と

一沛製 子ロト法ハ

上右袂不用圍ハ寸法也記祿不

と書置

一本和物類 花ハ院製也

一菅束常葉 菅束相之也

一 竹人竹

・法戸ヨ三作

一 非云木

・大政官ノ外謂非

三木亦友之云々云非考候也

一 教位

・是も亦友し人也

上十部ノ諸侯之云々定惠年表

と云々所あるは用紙スルマウ

大方雅ノ分作

一 筆本

・筆本と云々双紙代々

字通不同々 桐本楠 悦月抄

同類也

一 將軍家一々後法東極指取東極

詠歌曰此一篇以爲自受受而

拾彼家集果有之因今盡

工圖其像使飛鳥井木納書

非親書其詞於其上在之云

之事

・ありふてその南志より井りふ

水の友なりとをいふあゝとは

・後東極計時於公方家勢

會無川題藤爲書花一

産之詠よりあり

一 短尺之夏

・遊觴ハ陰月之

一 文三付の短天より能事
へ来方成す付んゆの寂初
し清らなるゆいとさうりまの
不知い古き短天の弘法を
何と頼所兼好がし短天の
とに不見いゆれなりうき
短天吾不見い定来つが
よりい後の夏や拙量信
一 多務志行したに神身つとぬれん
うきつにさうり付のこぬれん
・ ひとりまひさむいらしん

凡のうぬよりと一 中より能
あはれまるとい白ひの花うもた
かゝれりしつらまゝにいひ
とい白ひたまをゆくよもい
あはれいけりて色まららん
しんかや〜〜〜ようこ〜〜〜初
ま〜いゆ〜りあ〜き〜りま
さ〜り〜り〜り
一 さらさら〜〜〜実のつとるはに
こらぬの〜〜〜い〜〜〜す
・ 井きら〜〜〜葉集の〜〜〜なり

一 昔もねは秋のいさかきぬら
もねのりいよのいさかきぬら
・ ねえいひねえい作
うまふ証何も同事い
湯瓶 事申 吾度ナリ類を
役より日ねぬすいぬす
らしいをいさかきぬら
又つふいさかきぬら
人事い身の不祥を得
おれより日ねえ不化不進
一 一おれよりいさかきぬら

かやまの何のいさかきぬら
いさかきぬらいさかきぬら
おれいをいさかきぬら
又の教誡いさかきぬら
ちいを給おれいさかきぬら
也ト今身ねいさかきぬら
何れいい合をいさかきぬら
一 昔もねは秋のいさかきぬら
おれいよりいさかきぬら
いさかきぬらいさかきぬら
・ けい証意初染をいさかきぬら

如呼吸系氣をありのまゝに
Pかしてまゝに詞よがも
くつらひしてはねえ云を
其んともふたに仕作奇
業氣のうらふ只業氣のう
らねえ仕作よりそはく
優更らぬ種ははやく下句が
志はなふてうにうたはね
うらめ焼くけなりうらに
からばうらうらなれは
なりPかしてまゝに詞よがも

むきくかきかたれり
種々各条ニを作

一つらひにまゝに仕作
うらめ焼くけなりうらに
右秀の古きうらめ
二つらひにまゝに仕作
ちつらひにまゝに仕作
わらひにまゝに仕作
百道の味のとらふ
うらめ焼くけなりうらに
なりPかしてまゝに詞よがも

つらふ

一草花に咲くもかき置たり
かき置りしよまのさや火

・量の所よかほりて花

くすくすといむは花

かほりしよもかき置たり

を加へて

一草花に咲くもかき置たり

かき置りしよまのさや火

・トウ普賢つてま凡

あつりしよまのさや火

塵もくすくすといむは花

わし

かき置りしよまのさや火

かき置りしよまのさや火

・おれ道理は

かき置りしよまのさや火

かき置りしよまのさや火

かき置りしよまのさや火

一草花に咲くもかき置たり

かき置りしよまのさや火

・たのうてまをいらいし

想より祠と界下界中界と
尸のいふは少いなり尸相日
下略より多に注すと云はる
界之先物よりいけたるは
そのこと尸相想してあり
そのこと尸相想してあり
そのこと尸相想してあり
そのこと尸相想してあり
そのこと尸相想してあり

一相政忠度 實辨

右三人之考を後負つれば
その或古来を説く度
存作

・此之夏後負古人も有る
その相政の初代のみ
考述も教をたす尸作

山家花

一それより後一それより
くしりりのふれり

・おもしろい〜とほめてゐる
まじりに〜とあ〜のさし
澄り〜い

月希歌

一あけ後の露の白ひよつと
いよこがみほろの澄れ月
・清希先生と持寄易よ
お月ゆの中非即意作
一〜〜〜
〜〜〜
けみ又字し〜〜合意より

愚人の明鏡抄がしるすおら
けよちのん様よ〜被修す
愚存に比来け字のんも
うん〜〜存いた〜
〜
〜

・〜〜〜
比来この男女を、幼少の阿
友〜〜〜
〜
〜

一第冊集と〜字書は〜の記と

尸をいねりてまゝにうらむ
くぬぬぬぬ

・東陽集定巻作は是も
石ない

一古政古長 上の太だいと讀三ふや
だとうこすふや 古政古長

初う屋屋まらハちをまらなん
うらひいゆれほりーゆま

古今もは非と字入す

しも尸をいねりぬき成
初う屋屋まらハ

すふりーのまといりま

非の字なま

・まろふちり人のこの相生を

井りハいりーまろふちりま

・古長派は往昔の指い非々よ

子細まろふちりまは派作

一東州流百首の内喚子らのこの

初うすじりーゆり不念子細を

古きよまろふちり派作わね

見たり作

・まろふちり不被越ふ

一夏述懐 武子相公の作

依洞中製之申 不存作

一明教の書之入麻衣

あつたをては他の下凡

・上凡とてはあつた

・下凡とては是作

一新撰三百六十首是証紀氏新撰

中一作書字をせし進心

一慈心家集之方教三百二十首凡

沙汰不存及事の在依見の公

一源氏物語目録とては

二幸家河内實澄公著二系家

傳受とて系圖相見の深密

書付進下作の化之とては

一平康記之中 祐功院之夏是

照高院を書換作哉

・誰とては存不存少

二幸・少後之書之つれは

ふとては少の他は在序古

書付の之方書之方人

・少の少の少の少の少の

新撰 平康集 新撰

源氏

源氏物語は家元書

叔父代々集之中二六

新物撰

後撰撰

是ハ原ノ見下ノ作

言

掛りて原をもちつらうと此の

りし今より原をもちつらうと

・あふらふはいつ

甲板

らりにはもつたの中れまのま

尾上の境にららゆもた

・大橋のふもとよりうらんで

わやと柳のふもとに思ひの眼

・あまのつは神のつを念ふ

百本宗通教訓

七曜

あつたる原のふもとにうらんで

うらんでうらんでうらんで

梅川

うらんで梅川のふもとにうらんで

うらんでうらんでうらんで

・うらんでうらんでうらんで

何よきやうな事か
よんがしつゝふん

最量

草物うしろつらうもさつひの
そらうきりしりもあつたん
・堂証文出席をすまひ
しりすぬきしりぬき
唐紙つ送訓ふ

杜蟬

何りよ夕のあふれつても
すくまふのふれ衣よの素

・下白六初の花むき
くもは海しりしり
あはまや海あふくい衣
杜社の言方教むすま
唐紙

と白紙はあふくい衣むき
しりしりふんふん
・右二三白俗師ふん
かきしり師俗かきしり

一六酒言ひ 伊藤物類 伊藤物類

正月の北は清く
なりよ松の文もさうさ城のあや
月にひびいてさうもほろろ

冬月

み枯のちか葉のうらみほに
ひしりけりれぬ月印さるれ
・ひしりけりれぬとひけりけり
ふん半ばしせ

鷹狩

何したるいよゆの井枯人
あさをもさうささるも言ぬ
・たげのち明いさうも鷹狩

冬無作

積雪

らの此も雪ついでさるに
をりらあらんや雪もさうさ
ふふふ
・雪は雪や風の衣ぬさる
うしをさるさるさのふ

雪馬

ゆふ雪さる林のかりいり
かりをひらりやおもさる

独見月

三つ一れがさうささる月
ゆりりそれちやさうさる

常楽木音

何れにぬきあやうも之掃のこ
法印の板いしはうへへらう

米音音 云

かろりもいなるものいささあ
身よりつりつるはうへへらう

・けりてまをへ相違ひ

巨長

長ふぬとつるぬつりへは是ぬれ
かろりりりりりりりりりりりり
いしぬつりりりりりりりりりり
そ又古きゆもうなる音音音

何月

大井のなすのめりりりりりりりり
さうりりりりりりりりりりりり

・蒼海の系乳和音系がとん

紙作

あなをん 東事

けりりりりりりりりりりりりりり
らりりりりりりりりりりりりりり
・空のそん又化スル古事歌

海造月

いりりりりりりりりりりりりりり

ついでに月六の所へ一と後
こころをわすれぬ林凡を

師外書

くれぬをいふはあつたふふ中
わすれぬついでに人のしる
・里人の法言ふあつた

旅宿凡

初中ふれのおろしこほふ
夏たぬよろしなげやあつた
・旅のあつたのこころを
宿のしるあつた

社況況

社況況
川志の流のながふあつた
・上白下白の国を
こころを

ついでにやあつたのこころを
よろしなげやあつたのこころを
・おのれをわすれぬやあつた

由居

ついでにやあつたのこころを
あつたのこころをわすれぬ

・下白東に南西班ぬい

海邊丹

もろろも松浦の沖に流月が

こがらひしあやまやこころん

・西白あす及い

野介官

おくつらぬきまきいひくろく

いふふきやうのうらな

・何あひあふららるるあま

忠久意

う月あふくはむや津奥の

いふふきのふをまねくといひ

・いふふきのふをまねくといひ

らうらなになりおと難い

逢右過意

まうまひせりやこやこふれ

いふふきのふをまねくといひ

・こゆやよの白夏の字程

こゆ

述懐

いふふきのふをまねくといひ

おろろとせり南を河津池に

つはんは後具水及な作
うはこよや実家マの字
うりるんもこれがなり
但実家マも字はおほ
あつて後者のうりり
あは事切考く下作を
先取古字より詠歌本概
もおもひに都本集の内
古人の字をとるとマ
用は新撰古今ニテモ
座居心住の人をも字は

丸用

雅章マ

一ちうま清くもよるは津代より
うりり「富士」もよるは
は津代より物一の書お
うりり中より書るは
水及な
・字別紙作は氏く奇縁
あは後編
一夏のはし梅と詞い
んよるは

其の中心の意のつらぬくは
うら後らつたれぬを
是古よりいふ其後定事
其の意を其のつらぬく
只其の事や受伝
きく人いふや

一 其の中心の意のつらぬくは
そのつらぬくは
なりいふや

けりいふや
きく人いふや

・交伝書用山

一 其の中心の意のつらぬくは
桂光院知仁親王

三書 實徳云 三書 實徳云

中流也軒 光廣云

一 中流也軒 光廣云
交伝書

・書紙傳授

一 中流也軒 光廣云
其の中心の意のつらぬくは

其の中心の意のつらぬくは

一分草恋

後柏系院

神に五家ののむか争れは
ありけりうへれ左のそと

けり草恋うへり争れを

そとと争りしうへり

水及つれぬ

東系ぬ

一言

後柏系院

若きく作のねらやまをり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

そとと争りしうへり

一言

後柏系院

浦内にもれふ月公ら後世に
まをひらりのありけり
或人よの楳月がとく
ありの楳月がくは
奇楳は木若中よ若の
何れは楳月がくは
心持のありは若中よ若の
久不定楳楳がくは
うらな楳月楳月楳
かしく題はくは
具は楳子よ若くは

楳くは若くは若くは
何れは楳月がくは
楳の楳月がくは
くは楳のありは
用は楳のありは
かしくは若くは
くは楳のありは
楳の楳のありは
かしくは若くは
くは楳のありは

之作すべし

一海辺月 題を讀めば河
うまのほろりて月

一江上夜 夜の星りてあ

一意和後 ありてしら

がうのちんとも

一原の月 貞教親王

あまの月ふらふらその光

こころの林をふれりて居

よきまへと河常夜のま

りぬりて月の光をすまふ

五原を月し我又けりて
まら申すんはをうけり

・常夜の月の又後松の

・とをとも云けりも常夜

・如きと相す作

一わきりてのまへにこころの光

後頼抄は又文字よきりて

よむとよとけりありて

てし我

・獨中す是夜

一夕附る 所文字法

多氣をよむいふなり

一 威女をいふれりよとよりこころ
七夕をばまつ日ふと讀みぬ
といふこころいふ中ねぬりなほ
かたはれ哉

・ 題よりいふる七夕とよりこ
ころいふと幸に讀み作

一 古寺月は 法皇御製

古寺月も五更も折る
くじりふふのくちもいふ
け中製下句より月の心とせ

相見し作くまの心とも後
すや

・ むす氏源のいふと
ありあはのくちもいふ
月いふゆい

一 ころころの林を凡こころなり
但ころころの林れ神の色と名
よりり中よりまふ合よ平道
あのかと難く田口平少
ころころの林を凡こころなり
よりり中よりまふ合よ平道

・高代を自公林に定むる
一月を墨りとも流す一初流は
一がみのたれよのつゝとふたれも
梅をとりしり一候なり一
大島集に菊のうき言はれ
は言被遊ひとわぬは流るれば
・大は言中製とふ言ま
とやとせよとや高集に
高方中とふ言はる
湖底 東本
うらたれをふ物もとらふ

うほのぬらこつとふひら

三句通候

は高集

ひれどたれもほの水を凡一

こころをとりて高集あつひなり

二三三句とふとふ

秋を雨

こころをとりて高集あつひなり

りゆつりひと高集あつひなり

神の風雨と人ほらむ

ひらりひらりひらり

くは相違ひ

躑躅

そのこゝろの衣より一
いふはれはけしきも
衣の家なるをみるん
す相違ふは衣の衣か
況や衣の

七夕衣

そのいふの衣はす
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣

凡後草末

中から林の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣

推容の衣

衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣
衣の衣の衣の衣の衣

ふね紫

そなたとてふらりし。何あま
とこしけのふね紫もゆり

・下句よりとより後群也

ふね紫ゆりし。いふ哉。あま今

一しけいけい後とこしけ

いふとていひのいふあま

かんと同群といふ

初冬

さうらさやまきこの秋うらま
あに初冬七月志とれいひん

・きりうらとこしけり何あまゆえ

うつしけきりいよまきい

個あまきりしけい同群

さうらさやまき

初冬何雨

そよぬをそよぶもりあまゆ

あまゆもゆりやまきとれいひん

・うけのうら初冬もまきい

あまゆしゆりあまゆあま

あまゆあまゆあまゆあま

あまゆ

おれは世のりくくはつと
こやうのうまじすつ
・氏と礼下知

舞中には

あつ後をならやまを
うづめさうれいれつ
・いふうまじすつ
うまじすつ

おつう一は明がら
うまじすつ
・いふうまじすつ

別取す同い合

ふまじすつ

おつう一は明がら
うまじすつ
・いふうまじすつ
とをいすつ
夕互

おつう一は明がら
うまじすつ
・いふうまじすつ
とをいすつ
もむ無ん也

五景

お舟の人の杖の多きうを
下へはよよ早ね五景

五景音無

月夜浪意

ふよ身はかたしとては地他の
すうらふらふらふらふらふら

・秋風ふらふらふらふらふら

〜一月〜今〜ふらふら

ふらふら秋初〜是

意

〜らふらふらふらふらふら

〜らふらふらふらふらふら

・定かふらふらふらふら

〜ら古ふらふら同意

曉鶴

あつふのふらふらふら

ふらふら〜らふらふら

・あつふらふらふら家鶴

吾不但晨中哉分明

中夜

舞中夜 行孝

けふの世にふりかへしめしむのうらよ
のこもあつらひもあまをさうつ
・けふの世にふりかへしめしむ

落ふ遣凡

ちひもはれもつらに桜花
色のまにうらなはしこもらん

・五句下句離るるうら

常

いけふにふりかへしめしむの
おとさうつらもあつらひも
・ふりかへしめしむのうら

梅

こつやれちかきぬむに梅花
いりしちかきぬむに梅花
・ちかきぬむに梅花

落言松凡

夕ら言月の初も現るのちや
くしよのうらもあつらひも

・けふの世にふりかへしめしむ

早春長履 梅宗 源政房

と報らわいてあのをちかきぬむ
あつらひもあつらひも

・市町のまゝにまをせんす

おしじょうじ

市を度 表 市朝

・おしじょうじのまをせんす

・市町のまゝにまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

同 横田 市伴

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

市を度

市を度 表 市朝

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

市を度

市を度 表 市朝

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

・おしじょうじのまをせんす

市を度

初秋凡

四友

夜集義概

月出清光にさけよとてわかれの
しらべをたのむ秋の神を
・水のほとけもほとけ
らけらぬゆゑ

海辺月 疏海

そよ風を吹かすそよ風よた
月よとて後をたのむとて
・云の橋を月よとて後を
海終けよとて月よとて
とてとてとて

師外言 不業

ら秋の野にけしきかたも
のらぬもて言ふにたこれ
・指竹よもあそびのた
秋はうらやま中をた

忠久意 義概

とて秋の光にさけよとてわかれ
うらやまのうらやまは
・物の言はさかた

同 不業

とて秋の光にさけよとて

いしよふ神のまねちうけは
神のまのつらふ詞つらふ作

同

道楽

とつうも思つていざん幸御ても
ちうめうも身にけいもふこを
・幸月もちうめうもい

雨后水聲 行春

ちつちつと雨の音はなほ
水をもぬけいひもあつた
・幸月もちうめうもい

海后志

道楽

ちつちつと雨の音はなほ
水をもぬけいひもあつた
・幸月もちうめうもい

慶美極 伯元

ちつちつと雨の音はなほ
水をもぬけいひもあつた

・幸月もちうめうもい

雨の音はなほ

水辺五景 道楽

ちつちつと雨の音はなほ

ちぬえよりうにけりゆれ
・あまの糸の糸をさす
しるしひらり

郭公栲 一巻

しるしひらり
しるしひらり
しるしひらり
しるしひらり
しるしひらり

吾詩恋 同

うしるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く

愛述懐 同

滞の言はぬさあやもあまを
しるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く
しるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く
しるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く
しるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く

・かきかれ同字同くかり痛く
しるしひらり
・かきかれ同字同くかり痛く

一源氏物語云云集之源氏物語

一哉

・少くも後より少くも明の業

・少くも後より少くも明の業

・少くも

一厭意 人の我をいふ也

一被忘意 人の我をいふ也

一制制之内受令

クは申記 行くとて三々々

不苦く我は外不苦制書

マシハ制制も^{はあぢり}其^{はあぢり}の考造

一執り

執り制制多し其れ亦違ふ

一制制多し其れ亦違ふ

一かと誦す^{さう}と^{さう}と^{さう}

一法師 誦す^{さう}と^{さう}と^{さう}

一寺よりなる^{さう}と^{さう}と^{さう}

・少くも後より少くも明の業

・少くも後より少くも明の業

・少くも後より少くも明の業

・少くも後より少くも明の業

・少くも後より少くも明の業

雨後橋川

三 ち井にのびて...
ニ ちいし...
ニ ちいし...

・一三三三...
方ハ...

近し...

一 負志 ... 二人...

一 答云志 ... 何...

一 不類志 ... 同...

一 恋声 ... 音...

一 弁開 ... 及...

一 水御 ... ス...

一 虎と ... テ...

一 寸スガ ... 必...

一 トバカリ ... ガ...

一 ちぢれ ... オ...

一 ちりや ... ナ...

用ル...

古...

あ...

ち...

二...

ち...

あ代考えし方ニ一ノマニい各一
同作古今の考逸トハ凡情
詞をかり詠とを大方ん年
詠スル方をもいタ、先んのは
きこゆをセシシテケイコハハ
委曲のオモロキナハ自然之理
キコハスハ一首の詠ニラスハ

政マ橋 行孝

去のふよま橋のうら^ゆぬれ
しうら^ゆぬれしうら^ゆぬれ
新橋の音はきこゆら

うら^ゆぬれしうら^ゆぬれ
うら^ゆぬれしうら^ゆぬれ
新橋の音はきこゆら

けうの橋早獲ん
新橋の音はきこゆら

新橋の音はきこゆら

けうの橋早獲ん
新橋の音はきこゆら

新橋の音はきこゆら

清平上阿高いさかの字は
中ちゆうの字のこに重なりし
・とくらの重なりし
ゆら面鏡あやもし
一青の折せ時とき面めんひひききしし極ごく
すまひい只ただいいままのの飛ひ渡わたり
師しふふ 牛う鹿か
・中ちゆうのの代だいははななりりししはは
僻へき葉えははつつががくくいい也也

時々 同

印いんのの次つぎははななりりししはは
・名なののままははななりりししはは
名なののままははななりりししはは
作さく例れいととははななりりししはは

格々々 同

銀ぎんののややおおのの格かくははななりりししはは
夕ゆふととああららのの虹にじははななりりししはは
・天あまののややけけやや文ぶん字じ餘あまりり

浦うら持もち衣い 同

あはれん 居るよびさあはれん
唯ふのうやらんもらん
・あーのうやあらん
つきつらんをらん
早あふ

溪餘寒 竹寿

谷川のちいほ後の初あや
こほのれさこほささ
うらあははやあま
じまらんらん
初夜

庭のこほのよほあはれん
うらあははやあま
二二のほまわあ

ね友

よほあははのあはれん
うらあははのあはれん
・下勺絡をらん

機重橋

極あり人のあはれん
うらあははのあはれん
・情のよほあはれん

又月雨

山田原のほとりなる高崎村
そよよといかりにそよよといの民
・和面の道徳のきよきや
作らんともいひやうとい

五林

林きぬといふは市をのきぬを
おふといふは神にふりては
・林よあるは林のふりては
あふといふはあふといふは
うはといふはあふといふは

いよよよ

後書

明徳林とあふといふはあふといふは
神のそよよといふはあふといふは
・いよよといふはあふといふは

いよよ

いよよ

いよよといふはあふといふはあふ
招かんといふはあふといふは

・いよよといふはあふといふは

いよよといふはあふといふは

・ 古くよりうゑの法はよふと云ふ
作古より廿ニウラ三ウラある
事今論は大概三ウラ一
ウラより三ウラ泳まずゆゑに

東進網源

うへのに海は林やりのやうな
事ありしれあゝのーをうせ
・ 文の考にいよあり林のふ
といふ事いふ事

七夕歌

昔の代よりおとととく七夕佳

うの一夜にちやうとる

・ 舞えんやうとるはとにせむ

柳道

東流

ちう流の西より東流とんはは
いよのまゝとんはとんはは
・ ありしよとんはとんはは
いよ自とんは人のまゝとんはは
そのちう流

忠意

そらとんはとんはとんは

いふも志のよきをいふなり

一二白い

心家冬 平柳

ちり雪のうしろにうしろをぬき

うしろもなまふまのうしろ

うしろうしろのうしろ

うしろうしろ

あな根のうしろうしろ

うしろのうしろうしろ

けりうしろうしろ

うしろもうしろのうしろ

西谷うしろのうしろ

むらうしろのうしろ

還るうしろのうしろ

うしろ花のうしろ

うしろうしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

一古後林

昔のうしろのうしろ

右のうしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ

けまの百後とてはなむ武々
もまふりし川がよのれい
古き三詠のいねえ及上の
下野のよれ後ハ一方勿論
うけろ三傳り傳のよれ
もまりの舟のよれ
そうはゆりぬり實地詠
まらけいぬり勿論只今
もこのよれとくに形を
香樹古の尋りとい
右百後とては後形す勿論

一道中は師と定と、民部十ハ
同人ニテのたぬ秋
岩と道中とすハ民部十
こまのよれとすハなぬ

一舞中は

一三月五

実頁

式のよりむと年のよれは其
又のらんをわらぬいのりま
又まはをのよれ今下ハ
きと年のよれ人のらん
化者の年齢のよれ

きりぎりすのとりか
かきくまにつとむ
氏かあまのい

蚊を火

煙や息煙りぬせをむ夏の日い
とれて煙をくはす蚊を火
・煙燻す必死石浪なる

五杖

凡のまに杖うそくると根も
いしにがひく座の枯木
・五月のふ下白優がひ

舟菫

ひしを美いもそれ川菫の
中流へうたれて人をさあぬる
・舟菫を花してうら
ふり舟もさへいふ

扇

上へいりて扇梅ののを
くくぬいさの初うたれ
・三夕ふりて扇してまをい

お通

甲子

中山信長
佐治

あつちのいづれも
こゝにありては
・ 古くは常の
三句名れ川をの
あつちにて又
惟秋のうた
不承の歌

同

あつちのいづれも
・ 大和歌詩
保子いづれも
もといはれ
青陽青帝
先の
心
す

夏月

あつちのいづれも
ひらり
・ もり
よ

らりも一首夏月納涼の
ふりけいをいふふりも
納涼又掛枕に境をきり
他何れも言ふより
かきもいふ秋

七夕

らり夏のよひをきりて衣
七夕けいのりていふらん
・太二句以下一首扱を合
合の上と未夏の句は
思ひ思ひたるんて又文字

らり夏のよひをきりて衣

夏月照松

吹をいふもよかり夏の
うらふらの夏月をきりて
・初又文字送がしり
思ひにお送あゆむ秋
促於時候秋ハりふら
らぬことをいふより
吹つるんていふより

秋寒草

見り秋のよひをきりて衣

そしつゝふゆのまねらうる
・二三夕夜にれぬ花を
ほききこひのま又下
及しつゝふゆのまよふ
ふゆに二三に夕興倒作
うらふ

夕の意

あふれがふゆのまよふ
まよふまよふ中川のれ
・初ふふまよふのまよ
作しつゝ

夕意

うらふまよふのまよふ
まよふのまよふまよふ
・まよふまよふのまよ
まよふまよふのまよ

夕意周談 考

まよふまよふのまよふ
まよふまよふのまよふ
まよふまよふのまよふ
まよふまよふのまよふ
まよふまよふのまよふ
まよふまよふのまよふ

うた或は句(一)とて
思ふは後の句(一)とて
・は句(一)とて同字
ハカラス

逢不過也

わくくも何の家法おろし
うらひあつぬ人おつら
の極よあつらひとて
しゝ思ふはつれや他
ふもヨリ一とて

右の句一版も二とて

和歌ハ親句ノテ
ニタルク連続
テ坊ハ夏ハツキ
夏短トモも
んをよすは

一版とての夏

・はハ之ハ
テウヤラ
ウ節合
夏作
はの

予行舟とけんは分明
なうとらりぬこく
古きつて後んこくとも

批判一とん

一日卯く息取し内

夕納涼

夜あふがりのひらたのく
なうとらりぬのつ
心息地ト白を
るるふ多ふ林よ涼し
とつたぬけてまをわん

よるひの林のく
とらりぬのつ
んつたりや林よ
林のく
しや他は
印所
林よ
後柏東院
心息地

一の
らりぬ

古賢の「まゝ」の事

見出し通村が「まゝ」

「まゝ」の事

柳 巻

家じよ「まゝ」の枝「まゝ」

サビ青柳の「まゝ」

「まゝ」の枝「まゝ」

「まゝ」の事

枝の字「まゝ」

相見「まゝ」の字「まゝ」

大忍「まゝ」の事

「まゝ」の事

かく不見「まゝ」

「まゝ」 同

「まゝ」の事

「まゝ」の事

「まゝ」の事

「まゝ」の事

首の「まゝ」

初子規 只字卒赤三不臣
振三不臣

「まゝ」の事

「まゝ」の事

・兵の字々氏カ帰ん

初唐 同

枯骨はあつたかたは元よ又

と一へのをんくらのを

・音の中心糸結がうし

なく表むこもくくを

と一へのゆりわはをん

よるちち一ニ句を落れ

亦大マウきとムマウきをん

何月 同

しむ月のいりふりる大井川

このむのむをんはくの一は

・このむのむの月の新いも

りーわちかかしくはをん

悟一九一首すをん木にね

持衣 同

枯骨の枯しめの衣とらのりの

破よるちちいよやうはるる

枯骨のちねはらむらむら

まわらむらむらむらむら

・大まわらむらむらむら

むらむらむらむらむら

字よりとる事有りて来

字

何雨 同

名り其の更のいなる事有り
ふしんをいふ事有り

志くればの事いふ事有り

しんいふ

千字 海の後に
そ飛したる 同

名り其の更のいなる事有り
ふしんをいふ事有り

瑞の依尾其の依なり

さうよりいふ事有り

そ悟

瑞字 同

しん字よりいふ事有り

振字をいふ事有り

振字よりいふ事有り

振字よりいふ事有り

一候 秋 字よりいふ事有り

名り一二句致来事有り

白ふ事いふ事有り

作りの事いふ事有り

又まゝに
つら
川とて
まゝに

うら
こ
・
も
あ
明後
ま

は
ら
娘
上
川
む
つ
舟
は
れ
い
い

かぶらつとせきしんりやう

しんりやうしんり

何と云ふのつとけなむかひ

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

村雨のつとけなむかひ

かぶらつとせきしんりやう

かぶらつとせきしんりやう

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

園音

ものゝけつとせきしんりやう

しんりやうしんりやうしんり

むかひ又又家のつとけ

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

しんりやうしんりやうしんり

夕暮にちかしくぬる旅人
こころをなぐさむる道坂の雲
むねは夜更けの文字
けを結ぶ美の夕暮
とちか

長柄をふりし月音かき
あやももさるる美の夕暮
こころをなぐさむる

泊月

こころをなぐさむる
月音かきし月音かき

夕暮

こころをなぐさむる
夕暮にちかしくぬる
こころをなぐさむる
夕暮にちかしくぬる
こころをなぐさむる
夕暮にちかしくぬる

夕暮にちかしくぬる
こころをなぐさむる
夕暮にちかしくぬる
こころをなぐさむる

くはくはいりて申
きつぬいふちんか
こふたふんくしふ
しりし二首のんさの
うう

尋ちぬけらさきしひか
ありをともれくよ
いぬひんちんよふを
二三の白雀ふりか
志んふんかあそ
られり優美か

清ちあきりてしやた
かふちんすか
秀白のすれ父母が
あまのこさぬれい
ううう百賢のを
はゆかすんぬい
うううう

件れをすけつよ
ううふたれあ
・宋書年表の
件いすう

このあはれ世のまゝのあはれ

建意

うけしといひ世もさへしられぬ
さうりたるうらまはにせられしは
又又まねまへ

あつれいといひをきめし下御も
こころもいもいもさうりつじ

二首のわらむふ全あはれ

よりし記さすといひ和歌つきの

歌目しといひをきめし鎮創を記

新代うらむといひいさしつら

よのあはれもほらうらうら

三のうらうらうら

甲相

垣本焼つゝよまといひ海のむ

まの焼やれもいかならん

あつれいといひをきめし下御も

焼海人のいさしつら

あつれいといひをきめし下御も

述懐がいさしつら

あつれい

甲相といひお相にさあつら

ありとありありありありあり

・いふに六の果のよき果を

いふに垣はのりたれずん

いふにさひく甲虎を

・いふにさひく甲虎を

うつゝゝゝゝ

作紙

和方には海やちとくぬらん

ありれをうやよむは紙

・む

長きうぶ作紙の紙はあり

印のくゝとありありあり

・いふに六の果のよき果

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

いふにさひく甲虎を

・む

初阿比

もれお井よけし根は静か
く一たのたけまいり
・まの字あまら

海月

吹くはなほる海は後を
月うらみふ枝のほら
・塩風湖水まら

布引滝

きりきりとのせふの
きりきりひらふ布川の滝

・推遣ハタリニキリ

がりのまら

五七

・まの字あまら
・まの字あまら

・まの字あまら

・まの字あまら

・まの字あまら

・まの字あまら

五七

チナハルヨクモシキハシラカニ
サリシラハシラカニモシキハシラカニ

江と度

難波江や流し流のそをわき
カハシラカニハシラカニ
・らハシラカニハシラカニ
おしりしりしりしりしりしり
ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
ウラウラ〜このハシラカニ
柳

係平所り枝をたれハシラカニ
カハシラカニハシラカニ
・カハシラカニハシラカニ
カハシラカニハシラカニ
ハシラカニ

岸柳

岸柳ハシラカニハシラカニ
カハシラカニハシラカニ
・カハシラカニハシラカニ
カハシラカニハシラカニ
カハシラカニハシラカニ

凡情うつりてを夜い

懃客西月

目くらめいづるまきまきし結露
月影よんたのふりやどり人

・下句うつりてい二句い

赤遊女恋

信のよらふわわつら地雅も
ぞりまらぬらふりかあせの

・大休よりあはれをなま

山路

在りぬいづるはを板より

やまらふり人あまれがも

・たのむらぬぞりまらぬ

故の夜

まつとよらむいづるはを
われはむらぬらふりあは

・初句のは又まら

をふりあはぬあはれは
よらむらむらむらむら

・三句あはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

水鏡

草ゆえんは月のこゝろいやは流杯
がうをこゝろいれをそゝるゝあん
・そゝるゝあん

舞中送日

こりややまぬるゝのりや
あゝあは〜のりや〜と
・楊梅のん古きうを流杯
をよみ共旅中の心を擧げ

菅原友

けりやまぬるゝのりや
あゝあは〜のりや〜と

・あゝあは〜のりや〜と
ふゝあは〜のりや〜と
あゝあは〜のりや〜と
いゝあは〜のりや〜と

故の夜

あゝあは〜のりや〜と
ふゝあは〜のりや〜と
あゝあは〜のりや〜と

菅原友

あゝあは〜のりや〜と

・氏は云カケラレハテハいませの
ふまはほききイハ又いとは
石は厚いワ射上り相
違のマラニ
こころやいざのこころいざ
こころ一筆は流れたる
いかにあつたか
あつたの秋は相のあつた
あつたをいふか

寄堂恋

池の畔は流堂やらん恋と

こころをこれに流ぬかりい
・れうも流るるよを流る
類きも流るる一版紙切
と一重の凡情ヲ流る
一重に流るるい

同又月時

さくらんはさきのふはさな
かきやもしあつた
同又月
くさるるハハ
流堂又月

みけもはつちの年のがらふと
ものかりもある秋を境一尺
つひつれぬ一ひきのうまに
つねなるの同大月が月の
ひかりのくはいつあ
こまのれんが

けりよりいふ月ののしれと
こころなむ又月るべきの夜を
つねなるのくはいつあ
この歳まもつたものも
くはいつあのもつたものも

水也納涼

らんが夜あつたひのうまに
とまひしてしよふ水の
たつちまのうまに
つねなるのくはいつあ
つねなるのくはいつあ
つねなるのくはいつあ
つねなるのくはいつあ
つねなるのくはいつあ
つねなるのくはいつあ

つねなるのくはいつあ

つばは公是村二首作伝の

一 幽妻自筆下之東本おあんと
一 亦うりしにまふら路りをんと
二 ば公らとてちや二物とねん
一 水集もつれ書一附の
あをん二物哉

・ ちをんとおくま二東家の
東本よ細つばあをんと
幽妻らおりしに亦あをん
四物ほしく一余の集に
つれ書附いあんと四物伝の

一 續うりしに二のり多々伝の

・ 後うりしにきうりし一十首
又十首三十首は二とち
あ合し伝者ち傳ん後
百首又十首にがりし伝を
つきうりし一作に二物とねん
いん余たりしに川後うりし
百首又十首と一二人一
百首又十首をよりしとちを
一 作 伝 者 ち 傳 二 子 首
二 子 首 七 十 九 百 首 二 首

多岐をさうよとる意
工もましくと大お探詞も
けきりらわてしき
おわりつねに

夏 下巻

まゝなとまゝなつてつ
うしい青糸をたつたの根
・柔氣眼赤化や詩句
作秋鉅然凡情姿整
意も好可作

依巻

友衣うらつてれ水を丹の
わのうらつてふゆれ幼雪
・六月まゝ秋落つてま
と望むらあつてはさ
くらあつてつてまも
作らぬや

秋 行巻

富士の根はらものこり秋音れ
よふふのゆもやまらた
三三白雲にやうう
言あとり

たよりけむ白藤汁と
うもつりらととふん
うもつら左とつて云切
すし三作

下巻

うもつら左のいりたふのぬ
うもつら左の林のうれ丹
・焼くうもつら左の丹の雪
まひりたととらとらと云
ふもや左後混礼のう
いすしとらとらとらとら

依治

依治のうもつら左の丹の雪
いすしとらとらとらとらとら
・おまをたのみのうもつらと
うもつら左のうもつらとらとら

冬

下巻

うもつら左のうもつらとらとら
雪のうもつら左のうもつらとら
・上巻のうもつら左のうもつらとら
うもつら左のうもつらとらとら
うもつら左のうもつらとらとら

才人は悪合もろくも必
き海況礼しおんしん
雜

そまらふも怒ひがうとさうふ
いいつたせんゆーゆりら
・味らつふやんうーま
高振りし百集の句集
が紙やんの字整め余
久ふらや

残雪 書信

かれまろし梅がしらふあしこの

ひらくあこるしあのしらす
・海とまねの梅がしら
詠作

奇子祝恋 依信

あうあうのあうあうあういいああま
いけもまろしああのあああ花
・むなふむなふまろしああうあつあも
まらぬ奇恋の白ふら
他の褒貶いいふふんん次
奇ふ恋

かろふあうあうまろしああのあああも

らふちうらぬてのや
ふせのすくはつる
せしりんすい

未未他 東好

うらうらむねふゆふ
あぬらぬあせも
うけらういひあぬ
ふをふいすい
うあぬらうい
もんと作の

即草花

夕日ぬあし
あぬらうい
光達り説
説作

唐似字 同

江のぬに
あ
入江の
只
と
夕

そく・唐書はあはれぬ
・人の量にわらわつてふ
・つらきことふくむらうぬ
かきく作

廣満遠樹 義概

あめりか松ふらぬ掛
・いづれもふらぬ心
・松ふらの心とふらぬ
・心と混れぬ心
新中見志 依治
旅人法あめりか

・いづれらのあはれ
・唐ふれりや

同 義概

あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書

同 下巻

あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書
・あはれに唐書

松下暖系 詠

まより一の一むまをくをを
がうひよひやむかひつらん
・まをまをまをまを

荒吹寒草 概

む枝の中へわくの吹さて
小まにまのまをまを
・中への小まをまを
吹さてまをまを

同 春

ら中への枝はまをまを

・枝のれまにあり吹さり
・枝まの相枝れまを

雪似白雲 概

らまやまはまをまを
まをまをまをまを
二二白のらまをまを
はまをまをまを

同 春

・まをまをまをまを
まをまをまをまを
三白まをまをまを

同

紫

ちの糸まじり糸糸をこま
くまじりにけしきあらさ
は白より一のりいなり

同

概

枯凡にまじりけしきの糸も
らそけしき糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸

同

同

九市産糸の糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸糸糸糸糸

同上

糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸

同

同

河の原をよこす心も物かな
かたすめむとほし〜

・萬葉集のよみかた

舟のくもやい〜物替ハ

妹出^にかきん〜

ふいふもまれ〜ゆん

か〜けり

ふ花思故人

ゆり花もひ〜

〜名ぬ人ま〜

・右のよみかた

い〜

同

集

花をよみ〜

あに〜ぬ人ま〜

・このよみかた

花あ〜

〜す〜

花の〜

〜紙〜

〜

一 万葉集のよみかた

沖鏡とてあはれ有る事哉

之明題ヲ以用て茲に名

一口簾中の詠

旅衣しらぬら海にあり人は
かりけ友なり なほし

こゝかりけり かたし 衣も

ちん いん 悲し し 旅の

秋 あき 衣 い 衣 い 衣 い 衣

かよふ かよ 衣 い

あはれ あ 衣 い 衣 い 衣 い 衣

し し 衣 い 衣 い 衣 い 衣

た た 衣 い 衣 い 衣 い 衣

と と 衣 い 衣 い 衣 い 衣

け け 衣 い 衣 い 衣 い 衣

及 及 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

衣 い 衣 い 衣 い 衣 い 衣

の行を極す物と云ふなり

一 是より中府、作を依

二 一よりこの後授く事先達

法皇御尋し所考らせり

一より中 法皇殿に 作依

連歌がよむ古侍と云ふし水友の

一よりと云ふ名は只此の又の

大より一より一より一より

一より一より一より一より

一より一より一より一より

一より一より一より一より

一より一より一より一より

一より一より一より一より

一 八雲は交りて神々相傳作

二 伊勢物語は交りて神々の

一 華夷の傳授し内實國と云ふ

一 存在の平國との交りて

一 平光虎子息平國との傳授の

一 平光虎との相傳つて平光と云ふ

一 返つて云ふらるる事

一 上下物奇夷教と云

一 玉府より作或は伊豆玉府

甲斐西府のしんこうと
よこしまのふちくしんこう
あまのふちのたにのふち
かきくまのたにのふち

日野車相立

そこのふちのふちのふち
くまのふちのふちのふち

新撰新立春管家

浅深何れ氷橋結
高早云山舌不消
天の詩のふちのふち

池田

牛鹿

そこのふちのふちのふち
かきくまのふちのふち
・そこのふちのふちのふち

但馬倒し

林夕

事好

そこのふちのふちのふち
かきくまのふちのふち
・そこのふちのふちのふち

谷島

卯春

あまのふちのふちのふち

上列の如く谷川を
・たて大まきのらそと
・成じしよのまじり
・うも共ありぬん
・こよし古費の遠利なり
歩月也

らやひれを海の月れ月乾を
よの月の神をたけりく
・地やんしとく神はけれ
くわくしんぶり

歩月也 事後

はとあはれ神の用は川口も
をよめりしよのまじり
・何日ともまかたはく
くわくしんぶり

周右言 不盡

はとあはれをたけりし
かひしよのまじり
・上下の如く
をふま 同

まんのやまの地
まほやまの地

・少くも物もあつたかと思ふ

此の物もいさぐち

子規 同

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

七夕後掛 同

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

秋の月 同

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

・いさぐち物もあつたかと思ふ

まかにいふとくゆんやうらま

・氏名地元の方言の巻を

冬山噴 同

雪うふふ解のふいまう人

うらうらもふまうり明り

・おぢいあひんうらうら

い

兼言 同

それ人法身おのこをいしちうつのふまうらうら

うらうらあひんあひん

・之ううらにすい

返り 同

あひんあひんあひん

こいれいあひんあひん

・こいれいあひんあひん

不すけい

懐四 同

こらうあひんあひん

あひんあひんあひん

・水東家のうらうらあひん

不すけい

新教 同

さしひつゝのあはれをいつくさ
らうらにまゐるあつちよもれ
・三白つらきとしりつちも
れとあはれおんていおおま

落花 實志

あはれもはげまれを凡そ
うらむしあのおりてんれ
・下句いり

庭と落木 同

梅も雪も降りて庭の草は
がひわらうちをのんれよ

まの白んがくいり
三月五日 同

あはれもはげまれを凡そ
とつちおしををりてんれ
けはれ風情しめれしては
もまや

和志 同

あはれもはげまれを凡そ
あつちよもれを
あはれもはげまれを凡そ
あはれもはげまれを凡そ
あはれもはげまれを凡そ

うーいよまふしちものさむくの
ひーのほやわくしとがうら森
・はちろふんはくしとをうー
ちうられぬ・年(ア)もまぬ
ちうらものいあふのあふんを
たうらふいながしものさむくを
すうらふ(ア)とさうの俗を
まうらふは下白なうらふあふ
ちうらふ月ぬとちうらふい
ちうらふまぬものさむくの
ひーのあふやわくしとあふん

とまふん又は上うらうら
うーもまぬものいあふの
ちうらもの月ぬのぬわくし
あふんい泉ぬらぬぬを
ちうらものさむかかちうら
もまふんは今詩歌をよ
凡歌も俗なりしは唐
日かたは・ちうらうらと西の
ちうらうらうらうらぬぬを
ちうらうらけしとまの俗
かちうらうらうらぬぬを

ふいふうのま實定りし
先きをよのうくとよもの
いふまのう席よお座
しずかふ書代れうらふ
あしんとちんくがもう
がしんちりりふふうち
らまあもれぬれあふ
むりのういれけうも
一首ういゆ人席か
んらうくがふ

山中夕去

ふふふふお座のふま夕去
しずかふ書代れうらふ
あしんとちんくがもう
がしんちりりふふうち
らまあもれぬれあふ
むりのういれけうも
一首ういゆ人席か
んらうくがふ

ゆへ一字も多きん然らざるを
とよのよきとよのよき
あしひんよきをよしとよしよ
法皇御歌

よふらんよらや、とがん法皇
らるのらるよの五果を
は二句松づつらにけしれとあ
町あふも又法皇のよき
かんとつらよとよは松と川
高らのよれ松とよきよ
のらよよよよよよよよよ

何んよの松とよのよき
かよふらんよよよのよき
あしひんよきをよしとよしよ
よの五果をよきよ
よらよよよよよよよ
松づつらにけしれとあ
くれとよよよよ

凡光日新 行孝

相成るよよよよよよよ
いよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよ

此紙よりとてふまうの
想の花をさしつれぬ
月をさしつれぬ
くわらへりしとてふま
くわらへりしとてふま
月をさしつれぬ

春回月

春をけりし春の節も
しらの木を月へさしつ
・春の節もせん
らとせしつれぬ

恨意

マアせん井戸のつら
つらき心もさしつれぬ
・たつたつらつら
つらき心もさしつれぬ
つらき心もさしつれぬ

山家初唐 唐定

くわらへりしとてふま
くわらへりしとてふま
くわらへりしとてふま

かゝるこゝろをいふは秋のよれ

かきつばたのうらみ

居るまゝのふたふたのうらみ

とてしほひをいふものよ

実通しとていふは秋のうらみ

初心のうらみ

あゝあゝとていふは秋のうらみ

うらみ

後古

春附

ふ川のうらみ

あゝあゝとていふは秋のうらみ

とていふは秋のうらみ

下のうらみ

・五詠に秋のうらみ

春附に秋のうらみ

心切のうらみ

うらみ

のうらみ

あゝあゝとていふは秋のうらみ

うらみ

うらみ

うらみ

いりては思ふより作り作
りしは上句の時代こそ
凡そ左の事なりといふ
上句より時代の補はる
べきは思ふに高代も亦
春附のじりて新まじり
まじり下句のちまじり
下のちまじりとしてよ
の文字といふはまじり
よまじりいかにしり
ちまじりといふは入
りては思ふより作り作

いりては思ふより作り作
りしは上句の時代こそ
凡そ左の事なりといふ
上句より時代の補はる
べきは思ふに高代も亦
春附のじりて新まじり
まじり下句のちまじり
下のちまじりとしてよ
の文字といふはまじり
よまじりいかにしり
ちまじりといふは入
りては思ふより作り作

ともしらひぬちもぢりま
花の字を能く言ふ事
跡しゆしゆと申しむ
しゆしゆと申しむ
かゝりけりおつひとまの
れと作

安土思故人

字にうとをひりのまつら
多しと人ゆりしゆゆれ
・はれのまづれいかな
はるしん先いづるのれい

花をうと人ぬのよ
しゆしゆと申しむ
らひしゆしん左月花
はるしんと花高代と申
かゝりけりおつひとまの

同題

花はひりゆりのしゆの
かゝりけりおつひとまの
・はれのまづれいかな
はるしんと花高代と申
かゝりけりおつひとまの

ふんふんふんふんふんふん
ふんふんふんふんふんふん

古寺清

あをふあをのまれ清のまや
ふんふんふんふんふんふん

・氏志(海)ふんふんふん

新報東報下 雅世卿

ふんふんふん清のまふんふん
ふんふんふんふんふんふん
ふんふんふんふんふんふん
ふんふんふんふんふんふん

あふんふんふんふんふん
一版はあふんふんふん
あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん

陸奥ふんふんふんふん

田舎ふんふん

あふんふんふんふんふん
あふんふんふんふんふん

・と州の字抜い、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハの衣川と
おれりくハ

子日

子のひんちんにおれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ

長毛

おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ

初夕おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ

納涼

おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ

湖邊月

おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ
おれりくハ、おれりくハ、おれりくハ

むらりらららふまほの水波

まほの水波をねらり

林琴

松原竹のしほをまのつら
まろくちまほの林内をま

竹の吹折まほをま

竹(まほ)

竹似神

くれが井の神しほをま
まろくちま(れ)まろくちま
まろくちま(れ)まろくちま

まほまほまほ

まほまほ

まほまほまほまほまほ
まほまほまほまほまほ

まほまほまほまほ

まほまほまほまほ

まほまほまほまほ

まほまほまほまほまほ
まほまほまほまほまほ

まほまほまほまほ

まほまほまほまほ

くもささ切がまの河ちの既
かんの志はくもささくこ
まうらうささのうすし
うんたさえよとてゆき
あさけいかにささくわらう
あゆみの花んやとる作
梅さくはすささるん

新末志 倭成の女

かひらささの信もささく
よらとせよとの花信をさ
はさくは我をささるん

そさ信はかきりかきり
ささくささくささくささ
くく人の信はかきりさ
ささくはかきりささく
水作ささく信もささく
入ささくささくささく
ささくささくささく
はさくはかきりささく

作はささく

後川 唐定

後川 唐定

うふふのワルしつじの標のを
り兼ねにふは身よりけり所
けり口より法外のまを
かりしつじのなすつじ
ふは身より人けりしを
ふし記よふんまを口外に載
けり東那及事法毫末を
むはけりしつじよりあはれ
けりけりしつじより又二方
まよ書けりしつじより人けり
かりしつじよりけりしつじより

らりや推考の各人もあつて只
きりけりしつじよりけりしつじ
人けりしつじよりけりしつじ
ふはけりしつじより二級の中
けりしつじよりけりしつじより
けりしつじより法外よりけり
けりしつじのよりけりしつじ
けりしつじよりけりしつじより
けりしつじよりけりしつじより
けりしつじよりけりしつじより
けりしつじよりけりしつじより

こころをうすまうき
下句のうらみはゆはは作
法重くうらみはこころ
おろくくうらみはこころ
こころはこころはこころ
は中とさぬはま

一をうらみ

一都東

橋本まうらみはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ

こころはこころはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ

二東家マ飯倉遺事から秋葉の

一三三

一法重即思くはゆはは

掛巻

掛り紙はこころはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ
こころはこころはこころ

たのがうらみ既及三句くす

先日於 柳名付沙汰アリ
二三句能か言丸用付白
月やあなむがしの類よあは
音文く白也又梅枝を
くむゆす氏事 詠歌撰
之抄ホニ先を述むむか言
をあらぬおよぬ打んし云
け事なり梅枝の自然
吾別之也依之か言
梅枝の字とてこととて
よりなり

同

一左たに立うはるもまの枝は
らうよもむりのさねおきん
たを藤敷く糸衣の枝
をぬきをま唐々として
あな(二)平事友(一)よりあな
うるす(二)物と(一)中作中
えの枝の枝につれはる枝か
又或人(一)はく(二)し(一)か
もも各枝(一)は(二)ゆ(一)れ
らあ(一)は(二)は(一)ん

可也しきり白く清くは
しる道しるまをとしり
多しき道しるまを

・友ノ故ハトイハカカレニモ
友ノ夜ハト上句ニテスハハル
下句ノあらんトナリコ、口
ヨカラス休けテニヲハノ各ニ
メニエラハニキヨエニクハワレ丸
淨モお來い友ノ故ヤトイハ
立カレニモナキト秀句ヲカラ
スニテ友ノ故ヤを傳へ名ニモ

一 相懸ニテチカキニモリ成ラント

二 コノヨクナ人の友ノ夜ト秀句

三 ニウケともヤト疑フニ列

四 儼然はははははははははは

五 分々他半也既ニ何ニ清書

六 ヤニ決ニテ清書アラレ休又

七 其後 法實明石もモヤ字

八 テテテカラニテ結シ休中

教意人多ク作

一 二月三日

一 柳屋

一 東宮御院

一 典侍給子

一 吉原よりうらやまの紙をいれしもの

花心

一 寛平市村死シヨウゴト人下

一 一頁観の四時儀シヨウゴト修殿

一 坂ノ上

一 賀秋

一 羈旅秋

一 西大寺シヨウダイジのほり

一 歌川秋

一 一ものくまのりもゆるり野太の

一 夜来直子

一 平貞起

一 忍人の頭シノブノカビトウ

一 承均は所

一 誹諧奇

一 御侍ミヘイの心

一 思オモヒのよせん

一 ちんちんチンチンとせの骨ハネよめ

一 一ヒトのちんちんチンチンとせ

一 一ヒトのちんちんチンチンとせ

一ちぬの身なれい

一むらさきのあめきり

一よのらむらさきぬらぬ

一あまきく清濁の

たふ清濁の対

一下の板はも

はあもいりてをいし

のたや又清濁い

ニミ神のりるの板

もあしりくをり

一とりり 来り徳次 友と自作

一柳橋のふき

一はらばらとをいり

あふらぬや

まらせとをいり

かして板をいり

いり

一ひらりといり

・蟬の類

一あふらぬのり

がりる

一あふらぬ

たよりしんしんあかひんわ
・たよりしんしんあかひんわ

一 坂東のらけりつらものけいひ

たいうすのすらうたや

・唐船賣物の便也

一本ういさうりたものたういさう

人のもつた

大同

・ものたういと同す

一 大を中ねまきしとほやまう

一 大のこまう

大同

・曹司也

一 大のこまう

一 大のこまう

大同

一 大のこまう

一 大のこまう

・大のこまう

一 大のこまう

一 大のこまう

一 大のこまう

一あやま

カノロト思ふ人ト云
一アヲ云

・或も人ト云ふ人のいふ

かもしやうのうらな

ふんとやう丹のうらな

アノのうらな

一うらな

カノロト思ふ人のいふ
カノロト思ふ人のいふ
カノロト思ふ人のいふ

一あやま

カノロト思ふ人のいふ
カノロト思ふ人のいふ

・大いなるのうらな

一あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

一あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

・あやまのうらな

一あやまのうらな

ありりともふんは物の字也私云
うきふふく又あうくくこの
んり又右俗云うきうきとふ
うも用し歟

此類のこくふけ細い
古方を後口説し二流

一あやゆい へいさく やさふ

あらしがしと云ふしとふも
他吹余いさうくくあらしさ
たふと云詞叶はえいやく
ちしとふふく

一えりうれ れうくあし後兼

細長はんしうあふんちうき
うりりあ説をよとも用しり

此類の後兼あしの案よこ

うりりしと云うれのみあふ
られは身うりりしと云う
うりらあふととも用ふ
れりりらあふれよ身を
もさ

一うれをけりいさうのふし
うりや

・秋のふゆのそらにわらわら

相手をすい

一 うらうらうら

うらうらひ 同くふり

・たふふふふふふふふふ

・けいけいけいけいけい

一 とーハ 毛ハ体字をいへり云初

一 と志り 毛ハ心志をいへり

・このあはれをいへり

一 けいけいけいけいけい

ふふふふ

・秋のふゆのそらにわらわら

うらうらうら

うらうらひ

・たふふふふふふふふふ

・けいけいけいけいけい

・このあはれをいへり

・たふふふふふふふふふ

・けいけいけいけいけい

・たふふふふふふふふふ

・けいけいけいけいけい

・たふふふふふふふふふ

重ノ侍受之ハ方ハ清濁ト
古来宿先は信り付しを以
下友等ノ時及抄紙は公不家
先許ハ本指面ノ中ノ事ハ
物更書付中作速ニ撰ム
ハ勤ク程ハ 法重ハ宛ハ先許
等ハ二ノ作非信事ヲ相傳
仕ハト一度クハ先許ヲ許ハ
予等ハ以付付トハハ出テ
予ハ先許ノ事ハ二ノ事ヲ
・大ノ中ハ世トハアリトハ

- 一 古来宿先は信り付しを以
- 一 下友等ノ時及抄紙は公不家
- 一 先許ハ本指面ノ中ノ事ハ
- 一 物更書付中作速ニ撰ム
- 一 ハ勤ク程ハ 法重ハ宛ハ先許
- 一 等ハ二ノ作非信事ヲ相傳
- 一 仕ハト一度クハ先許ヲ許ハ
- 一 予等ハ以付付トハハ出テ
- 一 予ハ先許ノ事ハ二ノ事ヲ
- 一 古来宿先は信り付しを以
- 一 下友等ノ時及抄紙は公不家
- 一 先許ハ本指面ノ中ノ事ハ
- 一 物更書付中作速ニ撰ム
- 一 ハ勤ク程ハ 法重ハ宛ハ先許
- 一 等ハ二ノ作非信事ヲ相傳
- 一 仕ハト一度クハ先許ヲ許ハ
- 一 予等ハ以付付トハハ出テ
- 一 予ハ先許ノ事ハ二ノ事ヲ

爾是も信る言テツヨク

フルトツクハミカノ花を花
細面と書て小面のやうに花
を花と云ふ細面の花と云ふ
いふを、水皮を花

・粟根のこくこ根は原フルミ
原トテツクク降原ト云ふ
あふんと俗よシヨボく、西と
アマウのるん、西の材をナト
マウニガトウリチマズを花
細面よりニクくトマズと云
るよ、い新来を花

志くく、これいかり、るト云
さうも花也

一梅らりの又文字詠歌を概ニ云
瓶に、ツクハミカノ花成人よ、
梅らりと花と云ふ花成人よ、
其、天子と割の菊、ガキとの
子、ツクハミカノ花、
水皮を花

・天子と割の菊、ガキとの
天子と割の菊、ガキとの
天子と割の菊、ガキとの

元と果す一處に在るは

し中世し、其後とて其

・後しつゝ子也其

がしもおるゝい必其の

とてしつゝい

一好もつて其はるる

をさしつゝい

・たさし

ともよこ

つゝい

は方集の

相見の付言の

付言

実

手書き

すもよに

らん

たの

・ト白

たし

少れ

傳

大

月

一 其の心をよむべし

一 裁きよりの文法の主字の如く

心切に他れはふ所し

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

つとるも他人のあまなりなり

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 のことより裁きおろし他人のあまなり

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 古御 ・ 裁きよりの文法の主字の如く

一 貫束と奏進の文法の主字の如く

一 在るに用い作か ・ 裁きよりの文法

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 片のゆりの方おもく遠くをえ付

一 ありふるといふと云字のつひ
 一 ありふるといふと云字のつひ
 一 俳業集 此志取古也 不定
 定取 不定

一 神祇 社頭之事

一 神祇 社頭之事 社改

一 神祇 社頭之事 社改

一 親父味方の事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 年月の中より日 賀茂の出来

一 ありふるといふと云字のつひ

・ ありふるといふと云字のつひ

ありふるといふと云字のつひ

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

一 一うらの夜よりいふ事 改り事

三月の更也

一 東浦遺稿

三巻

うらやまふ 個もるもさふらう
神のまがふ 杖もらうらう

うらやまふ 杖もらうらう

一 津名伝

イカヨミ集

カミナニトヨミ集

一 交草伝 手書 ももらうらうらう

つゆりらうらうらう

あよりうらうらう

うらうらうらう

カのりふ 初也 此集ノ二後

一 よくの 初いふのんらう

・ 伝き也 ようと云んらう

うらうらう

一 なるなるよの 巻にかなう

らの 傳らうらう

一 けう 都来す 西川と云ん

・ 集集ハ 東浦遺稿と云ん

・ 東浦遺稿ハ 西浦かえん

一 かな かなの かなかな

うらうらう

・中よりいさくは後指建の事

化者也此よりいさくは後の事

又一代集道ヲ用化履の事

新元ヲハ用カタシ

一ふつら 嘆の慈石ニヤ哉

嘆の雲也嘆ニ用

一掃よりいさくは神祇の事

神ノ事ハ此ノ如ク哉

・垂仁天皇ノ御惱ノ時タニニヤ

ノ故事也

日本紀六二垂仁天皇九十年

春二月庚子朔天皇命

甲道間守遣常世國令

求非時香菓香菓此云
向供能米今謂

橘是也九十九年秋七月

戊午朔天皇崩於纏向宮

時年百世歲冬十二月癸卯

朔壬子葬於菅原伏見陵

明年春三月辛未朔壬午

甲道間守至自常世國則

賚物也非時香菓八等八

鬘馬甲道間守於是泣

悲歎之曰受命天朝遠
征絕域萬國蹈浪遙度
弱水是常世國則神仙
秘區俗非所臻是以往來
之間自徃十年豈期獨
凌峻瀾更向本土乎然
槩聖帝之神靈僅得還
來今天皇既崩不得復
命臣雖生之何益矣乃
向天皇之陵呼哭而自
死之羣臣皆流淚也

甲道間守是三宅連之
始祖也

けり公ヨル願莊密物云
系業燈常をわけ橋ヲイ
マテニワカオホキニハ今モニル
カモト間守カ神ニツクニテ
来リニカハ昔ノ人ノ神ノ有リ
スレト後リ定事何ノ神
ニテモ信ナントモ

一がうおりの月の中風を和や
くしやうらぬまはこゆる春

道達度印よあのか祿子

くはぬ玉免ノ一トすまふ

舞免ノ一也

いまよいのちのこ也よりいん
くはぬ玉免れあのか祿子

け文字 体留子

古書と雲林院ノ一子ノ秋

一本書 伝定 兼法作也

一百首の後奇とい式月又首は
こ首又首がしのかん是は
月志悪しといるるも奇

うーは後よん志ノ紙百首の内
二十首志といはぬよ奇志を
それよ志より一也といも
からんや

いふるもといもくもからん
印よん志やその月あや平
あやもーらぬ志も
け奇いふるのんといは
・序奇なりあやもあや
らんや

五甲の梅さつらんが

うしろの山に雲がたなびく

そよ風の匂が

ふわりと庭のすみかぎり

東海のみ
あかりのたつたぬく

らりともよぶる

じりりたる巻と書 巻

馬板と書

あけらうときりりたる

一文字のつり わつらと云ふ

まろくま

一橋と云ふ平人よりとも

うらや

くらりたる

なむれはまのゆか

えもあつた

林のうら 長閑と云ふ

昔や

ゆきよき

一浦あつた

白ゆきの

あつた

あつた

けういふのくちや
こらもつはるやたの
まもくくいきりし

一 郎部集佛名考に

うらふとに切身よはふ年
おらひじよさまはくら
仏名の考へも後じや

・佛名集書ノモ也

一 難波津に三つの浦より作
いさりのすくはるや
くせひ

・赤のちやがらのこつと云

一 丸のちやとちやとちや
リムキトトもあつたや
・赤のちやがら

ちやてけれらちやを
あはれちやもあつた
とちやのちやとちや
ちやちや

・陰陽のちやとちや

一 ちや
一 ちや
一 ちや

・丸のちや

・ちやちや

一 日くらひ 遊逸

一 わらう果 病果

一 志らのりん 吃のぬん

一 はらふのたのふりて

吃のぬんふん 吃のふん

一 もろろのようれ

・唐ぶらふてふん 夕ト(ハト云

んがかりきふん 考りて

海ふん 用ツケタルリ

九州大學圖書印

